# 木俣修全歌集

# 木俣修全歌集

木俣修全歌集

定価一八〇〇〇円

著者　木俣修

昭和六十年十月十日発行

発行者　明治書院　代表　三樹彰

印刷者　大日本法令印刷　代表　田中忠

発行所　株式会社　明治書院
千代田区神田錦町一―十六〈一〇一〉
電話二九二―三七四一　振替東京三―四九九一

© 1985　S. Kimata

星共社製本

# 目　次


市路の果　一

Ⅰ……三

Ⅱ……一九

みちのく　二九

日時計……三一

岩瀬野……七〇

高　志　八五

白　鷺……九一

梢火……一〇四
夕凍……一一五
街上旋風……一二八
群像……一三六
たたかひ……一四七
篁……一六三
日向……一七四


## 凍天遠慕


砂嚢のかげ……一九一
雪天悲傷……二〇二
遠ひぐらし……二〇八




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

道……二一六
流砂　二二五
とどろき……二二七
寸土……二三八
新月……二四八
流砂……二六二
冬暦　二八五
冬暦……二八七
落葉の章　三三七
忘れられし人々……三三九
しづかなる怒濤……三五二

地表のながめ……三七四
百　日……三八八
歯　車　四〇三
闘鶏の眼……四〇五
呼ぶ記憶……四二八
夜の草……四四八
潮　仏……四六一
天に群星　四七七
冬の序章……四七九
二月の星……五〇一
炬火の列……五一六

呼べば谺　五五三
書架のかげ……五五五
黄の鎮み……五六九
回復期……五九三
花辛夷……六一一
夏館……六三〇
落葉鳴る夜……六五七
去年今年　六七七
篁の空……六七九
土蔵……七一一
漂泊……七三五

愛染無限　七五九
紺深き空……七六一
木兎の呼ぶ夜……七九三
寒燈のもとに……八二三
嵐……八五五
谷汲　八七五
彦根……八七七
膳所……八八五
雪前雪後　八九九
峡に生くる人々……九〇一
普門品……九二九

炎夏病棟……九六一
雪　明……九八〇
昏々明々……九九三
昭和四十九年……九九五
昭和五十年……一〇〇九
昭和五十一年……一〇四一
昭和五十二年……一〇六二
昭和五十三年……一〇八二
昭和五十四年……一〇九九
昭和五十五年……一一三三
昏々明々以後……一一四三

昭和五十六年……二四五
昭和五十七年……二五六
昭和五十八年……二七六
解説……久保田正文…二八七
年譜……木俣章編…三三一
あとがき……木俣章…三三五
初句索引……三三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 市路の果

# I

## 悔恨

秋刀魚やきて夕がれひ食を
す硝子戸に時雨は降りぬ白く光りて
はやはやも使丁の小父はいねけらし巡視を了へて早く眠らな
里人の小父の藁打つ音すなりくもり日のひるなまあたたかく
うつしみをおろそかにせし悔くい
ごころうつろに冬の日ざし浴みゐる
胸ふかきこの疼きはもひとりゐてつつましく嘆くやまひなるらし
のど病みてはやいく月ぞ朝々のうがひはわびしきしごととなりぬ

ひさびさに宵降る雪のうがひの水捨つる窓より吹きこみてくる

たまゆらにこころかすむる面影よかくしつつつひに忘れ果てんか

むねぬちのいたみとどまらずひようびようと風吹きすさむ大寒に入る

うらぶれてわが入る丘は櫟生(くぬぎふ)に冬のひかりのかくも寂(しゃ)けし

みづからを責めつつ生くるこの日ごろ父に従ひてつつましきかも

## 山房夜狐

寒行のひとにまゐらす糟汁を煮る夜のいたも冷えにけるかも

墓原をたちもとほりてなく狐あられ降る夜の更けにけらしも

糟汁におもてふかれゐる夜のしじま狐のこゑはまた近づけり

夜狐のこゑを真似ゐし幼ならのいまは臥床(ふしど)にしづまりにけり

## 篁

笹ずれの音もやはらぐこの夜ごろとなりびとらは炉辺に長居す
かしこみて直立つ竹を切りにけり悠紀の田植に使はす竹を
わななきて怒りたまへどしかすがにはたちのわれを撫つこともなし
ともにある日もすくなきにちちのみのこころそこねてたどきしらずも
ちちのみの父のこころの解けゆきて春の夜の灯のいまはまぶしも
明日の日はここにあらざるうつしみか散りのこる梅の花を見てゐつ
夕づけるたかむらに石を投げてゐつ明日はわが家に別れてゆかん
まなび舎にかへる日は来ぬはそはが包みてくれし餅もてゆかん
また夏ははやくかへれよといふ母とゐる春の夜を蛙は鳴けり

## 大塚界隈

着のびせし洋服を釘吊にしたる壁なげかすらんか母が見まさば

間代やすき下宿のゆゑかひと窓の日ざしは部屋にながくとどまらず

公衆食堂にいつもあふ顔わが父の年ごろと思ふ人にしたしむ

銭勘定をあやまつことの多き性食堂の女にけふも笑はる

蚊帳買へと母がたまひし金もちて夏めくゆふべ街に出でゆく

移り住みて幾日もあらぬこの部屋をはやうとみそむ朝に夕に

リヤカーに積めるひと荷のわが家財ひきて越しゆく露路をつたひて

酒やめて術なくまさむ戸をたたく雪を聞きつつ正月の夜を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com